

令和3年度

北海道教育大学

附属函館幼稚園だより

NO. 13【号】



形づくられてきた様式の確かさ

附属函館幼稚園園長 外崎紅馬

今年度、お誕生会に「園長先生の紙芝居コーナー」の時間を設けてもらった。昨年、園にある紙芝居をすべて分類・整理し終え、いよいよ実演に向けてその第一歩を踏み出したのである。事前に紙芝居を選び園長室で一人、練習した。そして迎えた本番。紙芝居の舞台(紙芝居をセットし抜き差しする観音開きのあれ)を用いて、初舞台を踏んだ。

お誕生会は遊戯室で実施しているが、紙芝居を行うとき、それを観る園児及び保護者との間にはコロナ対策のためソーシャルディスタンスを保った。遊戯室という広さの空間で、紙芝居を観る側との間に距離をとると、実演する側の実感としては紙芝居自体のサイズが小さく感じられた。園長室では大きく感じられたが、遊戯室では想像していたほどの迫力がなないように思えた。「ちゃんと見えてるかな、見づらくないかな・・・」と心配になった。

大きさに不安を覚えたため、次からは遊戯室にある42インチのモニターを使うことにした。そのため、紙芝居を1枚1枚、スキャナーで取り込み、それをプレゼンテーションソフトに貼り付け、アニメーション処理を施した。モニターを使うことによって紙芝居の裏側に書かれている場面ごとの台本を見ることができないため、それも1枚1枚ワープロソフトで入力し、手元の原稿を作成した。1回ごとに膨大な手間暇はかかるが、大きさの問題は解消できた気がした。

そうこうするうち、コロナウィルスが息を吹き返し、お誕生会も遊戯室に園児全員が集まって行うということをやめ、代わりに、各保育室のモニターに遊戯室でのお誕生会の様子をオンラインでライブ配信することになった。いわゆる無観客の会場でカメラに向かっての紙芝居である。しかし、ライブ配信にともなう今度は音声聞き取りにくかったり、途切れたり、聞こえなかったりというトラブルに見舞われた。

そこで、今度はライブ配信をやめ、あらかじめ紙芝居の実演の動画を撮り、それを各保育室で再生する方法に変更した。しかし、何か釈然としない。アナログの紙芝居をやっているつもりが、それをモニターで行えるようデジタル化し、さらにライブ配信というIT化・ICT化へと移行、いつのまにか「紙芝居やってみた」的な動画配信を行うユーチューバーになりかけているのではないか。しかも、再生回数は、はな組・つき組・ゆき組の3回である。

ここに至って我に返った。原点に戻ろうとネット検索し、紙芝居を研究している団体を見つけ、その研修会に参加した。研修会では園の遊戯室の3倍ほどの広さの会場で紙芝居の実演を見ることになったが、空間的な広さや距離はあってもかえってその分、紙芝居の絵を集中して見るため、サイズ感はまったく気にならなかった。紙芝居はその大きさで問題はなかったのだ。むしろ、問題は実演する私の腕のほうなのであった・・・。